スペイン語

一　前史　―日本とスペイン語圏との関係

スペインとの関係

日本人が最初に接触した西洋人はイベリア半島からやって来た。戦国時代の一五四三（天文十二）年、種子島に来航したポルトガル人が最初に日本に到達した西洋人であり、通説ではこのとき鉄砲が日本に伝来したとされる。一五四九（天文十八）年、キリスト教が初めて日本に伝わるが、このとき鹿児島に来航したフランシスコ・ハビエル（通称ザビエル、当時の音ではシャビエル）Francisco Javierら三人のイエズス会宣教師が、実証されるところでは最初に日本に来たスペイン人である。この時代にはスペイン・ポルトガルとの交易が盛んに行われ、キリシタン布教に伴って文化的交流も行われた。そうした事績をしのばせるものとしては、十六世紀末から十七世紀にかけて天草や長崎でイエズス会が出版したキリシタン版があり、その中には日本で最初のスペイン語文献の翻訳「ぎあどぺかどる」（罪人の導き、一五九九年）も含まれる。しかし、徳川幕府のいわゆる鎖国政策によりイベリア諸国との関係は十七世紀前半に途絶えてしまう。

十九世紀半ば、アメリカの砲艦外交に屈伏し、日本は開国する。スペインとの外交関係は、一八六八（明治元）年

新政府が通商航海条約を締結したことにより復活した。スペインはかつての栄光を失い、中南米の植民地は大部分が独立していたが、太平洋海域では依然としてフィリピン、グアム、マリアナ・カロリン・パラオ諸島などを支配していた。この中で特に維新後の日本にとって重要だったのは、近隣のフィリピンの動向であった。ここでは十九世紀末にホセ・リサール José Rizal らによる独立運動が起き、東京外語が復活する前年の九六年にはエミリオ・アギナルド Emilio Aguinaldo らに率いられた武力蜂起によりフィリピン革命が始まった。初め独立運動を支援していた米国は、一八九八（明治三十一）年の米西戦争の結果、スペインに入れ替わってフィリピンの支配者となると、独立軍の徹底的な討伐をはかった。一九〇二（明治三十五）年に独立戦争は鎮圧されるが、その過程で二〇万以上の住民が犠牲になったと言われる。日本では独立運動に対する同情が強かったが、日米関係を重視する政府は傍観するしかなかった。しかし、独立運動を密かに支援する民間の志士が多数おり、独立軍に参加した者もいた。こうした国際情勢の中で外語創立期に入学した西語科生は、遠い中南米よりもフィリピンへの雄飛を考えていた者が多く、米西戦争の結果フィリピンが米国領になると大きな衝撃を受けたと言う。

中南米諸国との関係

日本にとって重要なもう一つのスペイン語圏との関係は中南米諸国に対するものである。一八七三（明治六）年にペルーと修好仮条約が締結され、中南米諸国と最初の外交関係が結ばれた。これは前年に起きたマリーア・ルス号事件（ペルー船が奴隷扱いで輸送中の中国人労働者を日本政府が横浜港で解放したことをめぐって外交問題となる）が契機となっている。ところで、明治期の日本にとって幕末に押しつけられた不平等条約を改正し、完全な独立国としての主権を回復することは最大の国家的悲願であった。その完全達成は、明治末まで待たなければならなかったが、

日本にとって最初の対等条約は一八八八（明治二十一）年メキシコと締結した修好通商条約である。この条約締結により中南米では最初の日本領事館がメキシコに開設され、東京外語が復活した一八九七（明治三十）年に定住を目指したものとしては最初の中南米移民がメキシコ南部のチアパス州に入植する。榎本武揚前外相が企画した「榎本殖民」の青年たちである。入植は事前調査の不備と資金不足のため短期間で失敗に終わるが、この後ペルー、ブラジルと続く中南米移民の先駆けであった。移民と貿易を中心とする中南米諸国との関係は、その後の日本にとってますます重要なものになる。こうした国際関係を背景に東京外国語学校の中に西語科が誕生し、成長して行くことになるのである。

二　東京外国語学校時代

1　西班牙語科から西語学科へ　一八九七－一九一九年

西班牙語科の創設

日清戦争（一八九四－一八九五年）と戦後の三国干渉は、日本の官民に国際関係の重要性と外国語に熟達した人材育成の必要性を改めて認識させることになった。日清戦争後はまた日本人の海外渡航熱が高まった時代でもあった。帝国議会の建議を承けて、一八九七（明治三十）年四月、時の伊藤博文内閣は高等商業学校附属外国語学校を開設した。ここに一八八五（明治十八）年の廃校以来、一二年ぶりに外国語学校が復活する。このとき設置された七語科の中に日本で初めてスペイン語専攻の課程が西班牙語科の名で登場する。ちなみに、一八七三（明治六）年創立の旧東

京外国語学校にはスペイン語専攻はなかった。

一八九七年九月に入学した西班牙語科の第一期生は正科六名、特別科一一名であった。正科は修業年限三年、特別科は同三年以内で、定員は各科一〇名であった。正科の授業はスペイン語のみ週二四時間で、文字どおりの外国語学校である。特別科は夜間の課程で、週一二時間以下であり、校長の許可があれば、正科の生徒が他の言語の特別科を兼修することもできた。この時代、入学時期はほとんどの高等教育機関と同じく九月であり、学年は三学期制で、一学期は九月、二学期は一月、三学期は四月から開始され、七月が学年末であった。

西班牙語科を開設するからには教授陣をそろえなければならないが、本邦初の創設であるため、人材を探すのに困難があったことは想像に難くない。まず、一八九七年九月、日本人で最初のスペイン語教師として桧山剛三郎助教授が採用され、入学した第一期生の教育に当たることになった。同年十二月にはスペインからフランシスコ・グリソリアが招聘されたが、待遇面で来日前に聞いていた条件と行き違いがあって手間取り、翌年正式に外国教師（大正後期からの呼称では外国人教師）に就任した。ここに教官二名だけの教育体制が一八九九（明治三十二）年の外国語学校独立時まで続くことになる。創立二年目の九八年には正科五名、特別科八名の入学があった。正科志望者は一五名いたのだが、七月の募集時には応募者がなく、九月に再募集を行ったと言う。この年から体操週三時間が必修となり、三年生は副科として経済学・国際法・教育学の中から一―二科目を兼修することができることになった。

この時代の授業は、教室不足のため二部制で、午前に二年、午後に一年が当てられていた。一年では読方・綴字・習字・書取・会話・作文・訳解が教えられることになっていたが、まだ教科書がないため、生徒はひたすら教師の口述するものをノートに筆記した。桧山は学校にあるコルティナ・メソッドのスペイン語教科書からとった会話テキストを筆記させ、暗誦させた。グリソリアは動詞の活用一点張りで、それをスペイン語訛りの英語で説明したので、生

徒たちは理解に苦しんだ。それでもスペイン語が少し話せるようになると、生徒がグリソリアを誘い、校外教授とか実物示教という名目で東京見物に出かけたと言う（平松輝太郎「回顧二則」『西班牙語同学会誌』一、一九一〇年）。

外語独立後の西語学科

創立三年目の一八九九（明治三十二）年四月に東京外国語学校は独立し、校舎も神田錦町に移った。同時に東京外国語学校規則が改正されて、西班牙語科は西語学科となり、また正科は本科、特別科は別科と改称した。本科は中学校卒業者に入試を課して合格者を入学させたのに対し、別科は修業年限二年と定められ、入学資格は同じながら入試は行わず、原則として職業を有する者を校長の許可により入学させていた。この年の七月、西班牙語科の別科二名（津田弘季、渡辺清）が修了し、東京外語が社会に送り出した最初のスペイン語修了者になった。二年前の入学時は一一名であるから、夜間に学ぶ生徒には修了までこぎ着けるのがかなり困難であったことがわかる。しかし、別科で学ぶ生徒も社会的には恵まれた階層で、官吏や他校の学生が多かった。この年九月の入学者は本科六名、別科四名であった。教科課程に大きな変化はないが、二年生以上は英語の兼修が可能となった。独立とともに学校の体裁も整ってきて、生徒と教官を会員とする校友会の組織、校章の制定が行われ、年一回の修学旅行が始まった。修学旅行は親睦を目的としたもので一九二九（昭和四）年まで続く。

外語独立の年、西語学科教授陣は、外国教師F・グリソリア、桧山剛三郎助教授に加えて篠田賢易講師が新たに委嘱され、計三名となった。教官三人体制になってからの授業は、グリソリアが読み方・作文・会話、桧山がスペイン史、篠田が訳読を担当した。なお、旧制時代には講師に専任・非常勤の区別はなかった。初期の頃の講師は、原則として他校または他官庁との兼任教官であり、今日の併任教官の身分に相当していたようである。この時代、職員名簿

の格付では教授、外国教師、講師、助教授の順であり、これが逆転して職員名簿上、教授、助教授、外国講師、講師の序列が確立するのは一九〇九（明治四十二）年以降である。

創立三周年を迎えた一九〇〇（明治三十三）年七月、西語学科は最初の本科卒業生三名を世に送り出した。三年前に入学したのは六名であったが、その半数は卒業までに脱落してしまったのである。この時代は一般に中退者が多かった。第一期卒業生の一人が金沢一郎で、外務省勤務を経て母校出身の教官第一号となる。もう一人の波多野（旧姓厚見）元治は兵役の後、農商務省海外派遣実業練習生としてマニラに派遣され、帰国後は銀行業界に転じた。残る一人伊藤信一は綿布商として成功し、後に名古屋綿糸取引所理事長を務めた。この年は本科の募集が行われず、別科に九名が入学したのみであった。教授陣では留学中の村上直次郎が七月に教授に任じられたが、それと入れ代わるようにスペイン語教育の草分けである桧山剛三郎助教授が十月に外語を去った。しかし、村上がスペインから帰国・着任するのは一九〇二（明治三十五）年末のことである。教官不足を補うため、外務省に勤務する甘利造次が講師を委嘱されたほか、翌〇一年には一期生の金沢が外務省から呼び戻され、助教授に就任している。

創立当初は専攻語のみであった教科も一九〇一年以降充実して来る。この年から正科語学（専攻語）は週一八時間に減り、西洋語の生徒は副科語学を英仏独の中から一科目週四時間選択することになった。その他に副科（選択科目）として従来の三科目に言語学と国語・漢文が加わり、各学年一科目程度選択必修となった。体操も従前どおり必修である。また、この年から卒業後も学校に残る研究生と一科目以上を選んで専修する選科生の制度が設けられ、西班牙語科では研究生が一名入学し、翌年選科生が一名入学している。

スペイン語教育の開拓者

日本人のスペイン語教師第一号である桧山剛三郎は、高等商業学校（一橋大学の前身）在学中にイタリア人ビンダからスペイン語を学んだ経歴をかわれて附属外国語学校教官に登用されたと言われる。高等商業学校では英語のほかに仏・西・独・伊・清・露・朝鮮の七国語の中から一つを撰修することになっており、日本で初めてスペイン語が第二外国語として教えられていたのである。エミリオ・ビンダ Emilio Binda（一八五〇－一九〇三）は北イタリア出身で、欧米各地で外国語教師を務めた後来日し、一八九〇（明治二十三）年四月に高商の外国人講師となった。その年ドイツ語とイタリア語を担当し始め、翌九一年から一九〇一（明治三十四）年まで一一年間スペイン語も開講していた。翌年三月に東京で病没している。イタリア人ビンダこそ近代日本で最初のスペイン語教師ということになる。

桧山剛三郎助教授は東京府出身で、一八九七年西班牙語科創設と同時に教官に採用された。しかし、わずか三年で外語を去ってしまったため経歴には不明の点が多い。かろうじて残っている挿話がある。一八九九（明治三十二）年、夏休みを利用してマニラに渡航した桧山は、米西戦争とともに再燃したフィリピン独立運動への関与をスペイン官憲に疑われ、拘禁されるという事件にあった。事実、この年の七月には独立運動の指導者アギナルドの同志とこれを支援する日本人たちが日本から武器を密輸しようとして失敗する事件（布引丸事件）が起きている。釈放された桧山はマニラで収集したスペイン語教材を持ち帰った。一九〇〇（明治三十三）年に教職を辞任した後は大蔵省に転じてメキシコに赴任し、再びスペイン語教育に携わることはなかった。

最初のスペイン人外国教師であるフランシスコ・グリソリアについても詳細はわからない。当時、スペインにはまだ日本公使館がないため、パリの駐仏公使が駐西公使も兼任していて、スペイン政府に講師斡旋を依頼し、その結果、グリソリアがはるばる極東の地に赴くことになった。一九〇三（明治三十六）年七月まで約六年間日本で教職を務め、

日本滞在末期の一九〇二年三月から翌年八月までビンダのあとを受けて高商のスペイン語講師も兼任している。

初代の外国教師F・グリソリアが帰国したあとを受けて、二代目教師を務めたスペイン人はエミリオ・サピーコである。一九〇三年十月から一九〇六年八月まで約三年間在勤した。法学士の学歴を持つ独身の青年教師で、帰国後は外交官となった。

四月入学への変更

一九〇三（明治三十六）年四月に専門学校令が施行され、東京外国語学校は専門学校に指定された。翌年五月、東京外国語学校に関する規定（文部省令）が制定され、これに伴って副科語学（副専攻語）の名称が廃止されて英語のみの必修となったが、一九〇七年から露伊西の三語学科では正科語学（専攻語）が週四時間増の週二二時間となり、代わりに英語が廃止された。

一九〇六（明治三十九）年に従来の九月入学が四月入学に変更となった。この結果、二学期は九月、三学期は一月からに変わった。ちなみに、明治初期の小学校は一月入学、中学校以上は九月入学が普通であったが、一八八六（明治十九）年に高等師範が四月入学に変わって以降小・中学校にこれが広がり、大正期には高校、大学にまで波及した。このように学校全体に四月入学が広がった原因は、学年を会計年度に一致させるためと徴兵の届け出期限の変更に合わせるためであったと言う（寺崎昌男『プロムナード東京大学史』東大出版会、一九九二年）。入学時期の変更に合わせて一九〇七年から卒業は三月となった。

一九一三（大正二）年二月、神田大火により校舎が全焼したため東京高商などの校舎を借りて授業が行われた。施設に恵まれない本学の不運の歴史の始まりである。夏休み後の九月には本校敷地に仮校舎が完成したが、この仮校舎

住まいはその後八年間も続いた。

専修科と速成科

一九〇四（明治三十七）年七月に別科が専修科と改称された。従前どおり夜間二年の課程である。これとは別に、一九一三（大正二）年の四月から西語・清語・朝鮮語の三語学科に速成科が設けられた。この課程は実用速成を目的とする夜間の課程で修業年限は一年であった。西語速成科には四〇名が入学し、その代わりに同じ夜間の専修科は本年以降七年間募集が行われなくなった。西語速成科は連続して三年入学が続いたが、一九一六年以降募集が停止される。入学者数に比して修了者数は非常に少なかった。たとえば、初年度に入学した四〇名のうち一年後に修了したのは五名にすぎない。その後、スペイン語の速成科が再開されることはなく、専修科のみ一九二〇年から募集が復活する。この年の入学者は三二名であった。この後、専修科は恒常的に入学者を受け入れていたが、戦後一九五一（昭和二十六）年三月に最終的に廃止された。新制大学発足時に教官の中から授業負担軽減の要求が強まった結果であった。もともと本科の担当授業数の多い外語の教官にとって昼の授業をした上に夜も授業をするのでは研究の時間がないという理由である。廃止によってこの点は改善されたわけであるが、その反面、予算や教官定員の上で本学は不利益を被ることになったとも言われる。専修科は、とりわけ海外渡航を目指して入学する生徒が多かったと言われるが、戦前から女子も受け入れていた。本科生が入学することも可能で、西語科学生が夜は専修科でポルトガル語を兼修するといった例も珍しくなかった。

篠田賢易

西語学科教授陣の変動

専門学校に指定された一九〇三（明治三十六）年当時の教授陣は、創立時の桧山、グリソリアの二人がすでに去り、村上直次郎、篠田賢易の両教授、E・サピーコ外国講師、金沢一郎講師の四名であった。一九〇七（明治四十）年一月に金沢一郎助教授が在任六年で実業界に転じ、その穴を埋めるため、卒業したばかりの馬場称徳（明四〇卒）と広中強介（同卒）が講師に就任したが、外務省勤務の馬場は海外赴任のためその年のうちに辞任し、代わって平松輝太郎（明三四卒）が講師を委嘱された。一九〇八年七月、村上直次郎が第三代校長に任じられ、スペイン語教育の現場から離れることになった。このため、村岡玄（明四三卒）が講師を委嘱されるが、翌年には退任する。これ以降、その年の卒業生が母校に残って講師を務める例が続く。一九〇九年には広中退任の後を承けて永田寛定、田中（旧姓沼田）豊吉の二人が、一九一二年には平松の後任として妹尾正男が講師となった。これらの教官は永田を除いていずれも短期間で退任している。明治期にはこのほか前記の甘利造次が一年足らず講師を務めている。一九一七（大正六）年には同年卒の日比文哉が講師となり、翌年助教授に任じられたが、一九二三（大正十二）年には辞任する。この時代は教授陣の変動が非常に激しく、西語学科の教育体制は万全とは言えなかったようである。

桧山の去った後、村上とともに教授陣の中心であった篠田賢易（かたやす）（一八七一―一九一八）は愛媛県出身で、中学校卒業後、在日フランス人外交官の使用人となり、その帰国に伴って一八九〇（明治二十三）年十九歳のとき渡仏した。

翌年、その外交官の新赴任地アルゼンチンに同行し、二年間滞在してスペイン語と法学を学んだと言う。再びフランス留学を経て一八九五年に帰国し、フランス大使館やスペイン領事館に勤務した後、外語のフランス語教官を志望したが、仏語科に空きはなく、その経歴をかわれて一八九九年（明治三十二）年、西語学科講師に採用された。後に村上が校長に就任してからは西語学科の主任教授を務めた。いったんスペイン語教師となってからは、その教育に熱意を傾け、日本人学習者に合う教育法・教材の必要を感じて、読み物と会話のテキストを編纂し、コンニャク版（ゼラチンを用いる一種の謄写版）で刷って生徒に配布した。蓄積された成果は『西語初歩』（Libro de lectura y conversación 東京外国語学校、一九一五年）としてまとめられ、出版された。日本人の手になる最初のスペイン語読本と言えるもので、著者名は記されていないが、氏の唯一の著書である。篠田はまた西和辞典の必要を痛感し、編纂に着手した。当初は村上とともに執筆を始めたが、村上の校長就任後は単独で昼（本科）と夜（専修科）の授業の合間を縫って原稿を書き進めた。しかし、篠田には喘息の持病があり、一九一八（大正七）年四十七歳の若さで急逝したため、原稿はFの項までで永遠に未完に終わってしまった。

G・ヒメネス・デ・ラ・エスパーダ

一九〇七（明治四十）年一月に第三代外国教師としてスペインからゴンサーロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパーダが着任した。生徒の間では「エスパダさん」と通称された。サラマンカ出身の品のある紳士で、マドリード大学卒の文学士、歴代で初めての学者らしい人物であったと言われる。教育熱心でもあり、生徒たちにスペイン文学を本格的に紹介し、実用語学以外の分野

へその目を開かせたのは氏が最初であった。また、新渡戸稲造『武士道』の翻訳を本国で出版した（マドリード、一九〇九年）ほか、外国人向けの「ちりめん本」叢書（弘文堂）で『松山鏡』など日本の昔話・民間伝承二〇編をスペイン語訳し、出版した（一九一四年）が、その後日本文化紹介の仕事に携わることはなかったようである。八年あまり在職した後、子弟の教育問題を考慮して一九一六（大正五）年帰国した。

入学状況と卒業生の進路

創立以来五年間、西語学科本科の入学者は年五―六名であり、一九〇〇（明治三十三）年のように入学者のない年もあったが、一九〇二年には入学者が前年の五名から二一名に急増し、しばらく二〇名代が続く。しかし、一九〇五年には前年二八名もいた入学者が日露戦争終結の影響か、募集をしなかったらしく皆無となり、一年生は進級できなかった一名のみになってしまう。しかし、このように入学者がないのは一九〇〇年と一九〇五年の二回のみである。一九〇六年には二九名に回復し、これ以降一九二五（大正十四）年に至るまで九―三九名の間で変動はかなりあるものの入学者が途切れることはなくなった。昭和期に入ってからは毎年三〇名前後となる。

海軍は一九〇九（明治四十二）年から海軍大学校学生を西語学科に選科生として送り始めた。一九一一（明治四十四）年にはこの第一回選科生（二年修業）一名が修了した。陸軍委託の西語学科選科生も一九一八（大正七）年に第一回生が修了する。このように陸海軍は明治末期ないし大正初期から断続的に年一名程度将校をスペイン語の選科生として送り込んでいた。しかし、昭和に入って戦時色が強まるにつれて現役将校にスペイン語を学ばせる余裕はなくなったのであろう。陸軍は一九三四（昭和九）年、海軍は一九四〇（昭和十五）年に各一名の修了者を出したのを最後に軍委託の西語部選科生は途絶える。これら選科生は、主に中南米諸国公使館の駐在武官に派遣するのが目的だっ

たようである。

西語学科は、入学者のなかった年に対応する一九〇三（明治三十六）年と一九〇八年を除き、一九〇〇（明治三十三）年の第一期以降大正末期まで毎年三―三〇名の卒業生を出していた。明治期（一九〇〇―一九一一年）の西語学科卒業生の進路を見ると、最も多いのは商社・商船会社・移民会社の社員と銀行員である。外務省・農商務省・大蔵省などの官庁と外国で実業を営む者がこれに次ぐ。一九一一（明治四十四）年の『東京外国語学校入学志願者心得』に記載されている本校卒業生就職の概況の項には、「ロシア語イスパニヤ語清語三語科卒業生ハ少数ノ官庁及ビ学校勤務者ノ外ハ実業ニ就キ海外ニ出ル者殊ニ多シ」とある。これに載っている本科卒業生職業別表によれば、一九〇〇年以降の西語学科卒業生の職業は、多い順に実業四七、官庁九、教育三などで、無職不明二〇、死亡七等を合わせ合計九〇名であるが、このほかに外国在留者が二五名いる。一九〇八年には第一回ブラジル移民が笠戸丸で渡航したが、このとき西語学科中退者・専修科修了者など計五名が移民会社助監督として現地で受入れに当っている。一九一六（大正五）年には葡語学科が新設されるが、この後も移民会社の社員あるいは自分自身が移住者としてブラジルやペルーへ渡航する西語学科出身者は少なくなかった。このように西語学科は、外語の中でもとりわけ海外で活躍する卒業生の多い伝統を持つ語科の一つであった。

ちなみに、明治初年から始まった日本人の海外移民は、最初は主にハワイと米国本土に向かったが、日露戦争後、米国では日本人移民排斥の気運が高まって来る。その結果成立した一九〇七（明治四十）年の日米紳士協約により米国とメキシコへの移民が事実上停止すると、移住先はブラジルを中心とする南米に転換する。ブラジルへの移民数が絶頂に達するのは一九三四（昭和九）年である。

第14回語劇大会（1933年11月）、「ロボ・エン・デスポブラード」出演者と西語部教官。前列左端から笠井、永田、金沢、令嬢マリアを抱くムニョス、馬場の各教官

語劇の始まり

外語名物の「語劇」、つまり外国語劇は、すでに一九〇〇（明治三十三）年から「講演会」と称する行事の催しの一つとして外国語による朗読とともに行われていた。記念すべき第一回スペイン語劇は『エル・ソル・ナシエンテ』という作品で、高商講堂で上演された。その後も「語学大会」という名で毎年挙行される行事の中心として上演され、娯楽の少ない当時、一般市民の人気も高かった。その絶頂期は一九〇八（明治四十一）年で、桂太郎首相や俳優の二世市川左団次まで見物に訪れ、人気のある出演者には女学生から多数の手紙が届いたと言われる。しかし語劇は、この年をもって中止となってしまう。当時、全国的に学校演劇が盛んになっていたが、学生・生徒が化粧・扮装して劇を演じるのは教育上弊害があるとの批判も出て、文部省が学校劇を禁止したからである。一一年後の一九一九（大正八）年二月に語学大会は復活し、神田のキリスト教青年会館で語劇が上演された。久しぶりの語劇は大変な人気で、観客が殺到し会場に入りきれないほどであった。このときのスペイン語劇は『人生一夢』

（P・カルデロン・デ・ラ・バルカ作）であった。一九二四（大正十三）年にも文部省の学校劇禁止措置によって一旦中断し、その後しばらく制服姿で対話劇を演じた時期があった。昭和に入ってからは「語劇大会」の名で呼ばれるようになる。しかし、日中戦争の始まった一九三七（昭和十二）年に時局に鑑み市民公開の行事としては中止となり、終戦後の一九四七（昭和二十二）年十月に「語劇祭」としてまた復活する。このときのスペイン語劇は『ピグマリオンの親方』（ハシント・グラウ作）で、会場は毎日ホールであった。その後も学園紛争期に中断したことはあったが、今日まで語劇は「外語祭」の中心的な催しとして継続している。

なお、西語学科の卒業生、在校生と教官を会員とする西班牙語同学会が一九一〇（明治四十三）年に組織され、同年から『西班牙語同学会誌』を発行し始めた。年代により盛衰はあったが、一九四〇（昭和十五）年文部省の方針により全国大学・専門学校の学友会・校友会等が解散し、報国団に改編されるまで活動を続けた。

村上校長と校名改称問題

第一次大戦中の一九一七（大正六）年、海外で活躍する人材の育成強化を意図した文部省は、次年度の予算編成に当たり東京外国語学校の学科課程を拡充・改組し、校名も「東京貿易殖民語学校」と改称することを計画した。この意向は、その年の十二月に村上直次郎校長を通じて突然職員・生徒に発表された。伝統の校名が改称されることに衝撃を受けた在校生・同窓生は、新校名は一種の実務学校への改悪を意図するものだとして校友会・同窓会を中心に激しい反対運動を起こした。翌一八年一月には校名存続期成同盟会が結成され、帝国議会や新聞に働きかけた。そのため、問題は議会両院の予算審議で取り上げられ、ついに文部省は校名改称を撤回するに至った。しかし、問題はそれで終わらなかった。反対運動の攻撃の矛先は、計画を強行しようとした村上校長に向けられた。同窓生・生徒・教職

員が集会して校長弾劾を決議し、校長排斥運動へと発展する。結局、この騒動は、文部省が同年九月に村上校長を東京音楽学校校長に転出させ、入れ替わりに同校から茨木清次郎校長を転任させることで決着した。

村上直次郎教授（一八六八―一九六六）はわが国におけるスペイン語教育の開拓者の一人である。しかし、本学でスペイン語教育の現場にいたのがおよそ六年間にすぎなったからであろうか、この面での影響力はそれほど大きかったとは言えない。村上は大分県出身で、帝国大学文科大学史学科を卒業したが、帝大在学中にすでに高商でビンダのスペイン語の授業を聴講していたと言う。一八九九（明治三十二）年文部省留学生として南洋史学研究という目的でスペイン・イタリア・オランダへ三年間の留学を命じられた。翌年、最初の留学地イタリアを経てオランダに滞在中、西班牙語科教授就任の話があり、これを受諾して急遽スペインへ移った。帰国して実際に教壇に立つのは一九〇三（明治三十六）年のことである。主任教授として教鞭を執ったが、一九〇八年には四十歳の若さで校長に任命され、この年度をもって西語学科の授業から離れてしまう。校長在任中は、自分の専攻の観点から特に東洋に目を向け、蒙古、シャム、マライ、ヒンドスタニー、タミルおよびポルトガルの六語科を新設した功績は大きい。しかし、校長排斥運動が噴出するまでには、校長がともすれば語学科目を軽視し、担当教官を冷遇して留学させないなどという語学系教官の不満が学内に高まっていたようである。帝大出の若い校長に対する反感もあったかも知れない。村上は東京音楽学校校長を経て台北帝大教授に就任し、退官後は上智大学に移り、戦後同大学の総長を務めた。日欧交渉史・キリシタン史の業績は著名であるが、草創期の本学スペイン語教師であった事実はあまり知られていない。

校名と学校の理念

顧みると、大正期のこのとき貿易殖民語学校と改称していたとすれば、終戦後本学は存亡の危機に瀕した可能性も

ある。というのも、私立の拓殖大学はその校名と歴史が災いして占領軍により廃校寸前まで追い込まれ、占領中は紅陵大学と改称しなければならなかった例があるからである。大正期に続く本学の校名改称問題は、第二次大戦中に再燃した。このときは「外国語」という名詞が戦時下に忌避されて東京外事専門学校と改称させられた。しかし、この改称は単なる名前だけの問題ではなかった。学則によれば、外専は「海外諸民族ノ諸事情及其ノ言語」に関する高等教育を施す学校とされ、外国語よりも「事情」を重視する姿勢が見られる。戦後、新制大学に転換する際にも大学設置委員会の審議過程で外国語大学というものの理念をめぐって意見の対立があったと言う。大学側が外国語教育を主とする大学を志向したのに対し、委員会側は外国語を学問のための単なる補助手段と見なし、外国語学部構想に否定的であった。この対立は、本学の伝統の中ではいわば語学派と事情派、あるいは言語派と地域研究派の理念的対立につながっていると言える。両者の葛藤は現在も学内で尾を引いているのであるが、その萌芽は大正初期の校名改称騒動の際に初めてその姿を現したと言ってよいのではないか。

2　西語部への改編と発展　一九一九―一九四一年

一四語部三科への改編と四年制への延長

一九一九（大正八）年、校名は存続運動が功を奏して元のままとなったが、実質的には当局の方針どおり学科課程の改編・拡充が行われた。九月に東京外国語学校学則が制定されて、各語学科が語部に改編され、各語部は文科、貿易科、拓殖科の三科に分かれることとなった。西語学科は西語部に改編され、在校生も経過措置をとりつつ三科に所属することになる。三科の専門科目は各語部の生徒が合同して授業を受けた。それまで専攻語は各学年週二〇―二二

時間課せられていたものが、一・二年生は週二二―二三時間でほぼ変わらないものの三年生は週一六時間に減らされ、その分だけ語学以外の専門科目を学ぶよう変更された。翌二〇年から入学時に三科に分けて募集が始まったが、西語部の入学者は貿易科・拓殖科が各一二名、文科が三名の計二五名であった。これ以降の西語部入学者は常に貿易科が多数を占め、拓殖科がこれに次いだ。二一年には新課程による最初の西語部卒業生（文科三、貿易科二〇、拓殖科六、計二九名）が出た。夜間の専修科は従前どおりで三科の別はなかった。

三科体制による募集が始まった一九一九年早々から同窓会・在校生を中心に教官も巻き込んで修業年限二か年延長の運動が始まった。語学科目にそれ以外の専門科目が加わったため時間割がきわめて窮屈となり、修業年限三年では時間数が足りないという理由である。第一次大戦後のこの時代には高等教育の充実が叫ばれ、全国各地の専門学校で大学昇格運動が起きていた。運動が功を奏して一九二〇年に姉妹校の東京高等商業学校は東京商科大学に昇格し、慶応、早稲田などの私立大学もそれまで専門学校扱いであったものが、正式の大学として認可されることになる。しかし、外語では昇格運動とは一線を画し、年限延長に集中して熱心な運動が行われた。帝国議会への請願が功を奏して一九二一年には衆議院で年限延長に関する建議が可決されている。この結果、翌二二年、高橋是清内閣は修業年限を二年ではなく、一年だけ延長することに決定した。同時に東京高等工業学校など専門学校五校の大学昇格も認められた。外語は名を捨てて実をとったと当時の長屋順耳校長は述べているが、可能性のあったこの時代に大学に昇格しなかったことは、アカデミズムの伝統を築く上で本学の歴史に暗い影を落とすことになったとも言えるだろう。

修業年限延長の閣議決定はあったものの、翌一九二三（大正十二）年には関東大震災があって外語は麹町元衛町の新校舎を全焼し、まず復興に追われることになった。この校舎は、神田大火後の仮校舎がようやく再建されたもので、木造建築としては東京随一とも言われたが、威容を誇ったのはわずか二年間にすぎなかった。結局、現実に文部省令

が改正され、四年制への延長が実現するのは一九二七（昭和二）年四月まで待たなければならなかった。翌二八年から学則上は三科のままであるが、学則施行細則上は文科を文学科と法律科に分け、事実上四科で授業を行う体制となった。同年の西語部入学者は貿易科一四、拓殖科七、文科・法律科各五、計三一名であった。ちなみに、一九二一年創立の大阪外語は三年制で、三科の別はなかった。このように教育課程の充実は図られたが、校舎・設備の貧弱さは覆いようもなく、震災後から戦時中まで実に二〇年も学生たちが「鶏小屋」と呼んだ粗末な仮校舎住まいを再び強いられることになる。

戦前期の学生動向

学校の施設面の貧弱さにはかかわりなく西語部の入試は難関で、三科体制となった一九二〇年には定員三〇名に対して七倍近い志願者があった。その後、倍率は落ち着いて行くが、大正末期から昭和戦前期まで毎年三倍前後を保ち、全国から優秀な入学者を集めていた。入学後も、一学期が終わると夏休中に成績不良の生徒には遠慮なく諭旨退学が申し渡されるなど厳しい勉学が要求された。

第一次大戦後から昭和初期にかけての時代は全国的に学生運動が盛んであった。一九二九（昭和四）年に始まる世界大恐慌が日本にも波及し、不況と就職難が深刻化したことは一段と運動を激化させた。それが全国的に頂点に達す

校庭にあった金沢一郎胸像

るのは一九三一年であるが、翌三二年六月には食堂値上げ問題を契機に外語生がストを決行し、校舎を占拠するという事件が起きている。以後、外語における左翼活動は退潮し、非公然化して行くが、日米開戦の頃までその残照があった。

卒業生の進路について『東京外国語学校一覧（昭和十四年度）』（一九三九年）の「本科卒業生職業別調」を見ると、同年五月現在の西語部卒業生総数は五八八名、うち死亡者八九、帰趨不明者四七を除き、多い順に実業二六三（会社・商店二五一、銀行一二）、官庁七三（うち外務省三六）、自営業三九（うち商業一五）、協会・組合・事務所等三七、教職二五（うち大学・高専一四）となっている。注目されるのは、戦後と違って官庁関係がかなり多いことである。これは戦前の外語全体に言える傾向であるが、その中で西語部は、とりわけ外務省（本省・在外公館）が多いのが特徴である。また、英語部では最多数を占める教職関係が非常に少ない。英独仏と違い、戦前スペイン語を教える学校は一部の専門学校に限られていたから当然の結果である。総じて西語部は貿易・商業を中心とする実業界に進出する卒業生が多数を占めていた。

大正・昭和前期の教授陣

篠田賢易の亡き後、西語学科で主任を務め、長年その中心的存在であったのは金沢一郎（一八七八―一九四五）であった。和歌山県出身で、外語の第一期卒業生（明三三卒）である。卒業後、外務省に一年間勤務してから母校に招かれて助教授となった。しかし、六年後には東洋汽船会社に転じ、南米各地で勤務した。明治から大正にかけての時期、西語学科は教官の出入りが激しく、教授陣は手薄であった。このため、金沢は企業に転職した後も帰国中であれば頻繁に母校に呼ばれて臨時に講師を務めていた。ところが、永田の留学直前に篠田が急死するという突発事が生じ

たので急遽母校に招かれ、再び主任教授を務めることになった。金沢は『西班牙語会話篇』（一九〇五年）を皮切りに一般向けの文法と会話の著作も手がけ、『和西新辞典』（一九一九年）など辞書の編纂にもかかわった。また、教室外でも学生の面倒見がよく、昭和初期の不況の時代にも親身になって就職の世話などを行った。こうしたことから、まだ在職中の一九三六（昭和十一）年に徳を慕う同窓生有志の手で竹平町の校地内に胸像が建てられた。戦前校内にあった銅像は、金沢と鈴木於菟平（露語）両教授のものだけである。しかし、両方とも大戦末期の一九四四（昭和十九）年に金属供出で姿を消した。晩年まで独身であった金沢は、退職後、奇術師松旭斎天勝と結婚したが、数年を経ずして夫人に先立たれ、終戦直後に疎開先で病没している。

永田寛定

永田寛定（一八八五－一九七三）は東京市出身で、一九〇九（明治四十二）年卒業と同時に母校の講師に採用された。一九一八（大正七）年に教授に任じられ、以後一九四五（昭和二十）年に定年退官するまで三六年にわたって教職にあった。村上以後二〇年近くも西語学科から留学を許される教官は絶えていたが、村上校長退任後、学校の方針が変わって永田は二年間スペイン・南米留学を認められた。外国人教師エスパーダの薫陶を受けた日本で最初のスペイン文学者と言える存在であり、大正期から生涯にわたってスペイン文学の作品を多数翻訳・紹介した。特筆されるのは、日本で初めてセルバンテスのドン・キホーテ第一部をスペイン語から直接翻訳したことで、終戦直後の悪条件下に筆を進め、刊行した（『ドン・キホーテ正編一－三』岩

馬場称徳

波文庫、一九四八―一九五一年)。翻訳が未完に終わった第二部は、恩師の遺志を継いだ高橋正武の手で完成し、文庫版全巻六冊が刊行された(一九七七年)。戦後、永田はスペイン語学界の長老として日本イスパニヤ学会設立を支援し、その初代会長を務めた。

一九一九(大正八)年には卒業したばかりの笠井鎮夫が助教授に採用されているが、この後の時期には藤谷覚三郎(大七選科修了)、田中辰之助(大六卒)がそれぞれ一年ほど講師を務めている。例外的に長期間講師の任にあったのは馬場称徳(一八八一―一九七〇)である。馬場は長野県出身で、一九〇七(明治四十)年卒業後外務省に入ったが、在職のまま一年足らず講師をした後、一九二三(大正十二)年末に再び講師に復帰し、金沢の退官後二年間だけ教授として在任、さらに一年講師を務めて一九四四(昭和十九)年退任している。丹羽昌一の小説『天皇(エンペラドール)の密使』(文芸春秋、一九九五年)はメキシコ革命当時、日本大使館の書記官として邦人移住者を避難させるため活躍した馬場をモデルにしたと言われる。また、外国人教師として一九一七(大正六)年ムニョスが着任するが、その前の大正期にスペイン人のE・レボリェードとA・グアスクがそれぞれ三―四か月程度講師を務めている。

戦前期の教材と辞書

日本で刊行された最初のスペイン語入門書はC・イニゴC・Yñigo『スパニシェ会話』(丸善、一八九七年)と見

られるが、明治・大正期は言うに及ばず昭和に入ってからも市販されているスペイン語の入門書・参考書の類は非常に少なかった。大正期には、村岡玄『西班語会話文法上・下』（西班牙学会、一九一五年）などいくつかの入門書が出版されているが、篠田の『西語初歩』を除くと国内刊行の教科書はなかった。生徒は教官の口述や板書を書き写して勉強したが、読本はスペインから輸入したものが用いられ、入手困難な場合はタイプしてコンニャク版で刷ったものが使用された（笠井鎮夫『スペイン語初学記』昭森社、一九六二年）。コンニャク版は、後に謄写版に変わる。しかし、笠井鎮夫『西班牙語四週間』（大学書林、一九三三年）および佐藤久平『スペイン語第一歩』（白水社、一九三四年）が刊行された頃から、相次いでスペイン語の入門書・教科書が出版されるようになり、昭和十年代から大戦が始まるまでの期間かなりの活況を呈した。ちなみに、佐藤久平（大五卒）は大阪外語創設時に主任として西語部に招かれた唯一の東京外語出身者である。

村岡　玄

スペイン語学習に必須の西和辞典は、大正期に酒井市郎（大二卒）『新訳西和辞典』（岡崎屋書店、一九一六年）と日墨協同会社編・金沢一郎他校閲『西日辞典』（右文社、一九二五年）が刊行されたが、あまり普及せず、学生は昭和期に入るまで洋書の西英辞典に頼っていた。一九二七（昭和二）年、村岡玄『西和辞典』（東京西班牙語学会）が自費出版により刊行された。語数の多い本格的な辞典であり、戦前にはこれが事実上唯一の標準的な西和辞典であった。しかし、熟語・成句がほとんど載っていないため、

西語科生徒はラルースやアカデミア中辞典（Diccionario manual e ilustrado de la lengua española）などの西西辞典やカッセルなどの西英辞典に頼ることも多かった。和西辞典は、金沢一郎『和西新辞典』（丸善、一九一九年）が大正期に出た後、本格的な辞典として在日スペイン人神父フワン・カルボ Juan Calvo による『日西大辞典』（三省堂、一九三七年）が刊行されたが、高価なこととローマ字表記で使いづらいこともあって、あまり普及しなかったようである。

なお、一九二三（大正十二）年末スペインの人気作家ブラスコ・イバーニェス Vicente Blasco Ibáñez が世界一周旅行の途中来日し、金沢・笠井ら西語部教官が応対しているが、これを契機にしたかのように翌年以降ブラスコを始めハシント・ベナベンテ、アソリンなど主に現代のスペイン文学作品が多数、永田や笠井によって翻訳出版されるようになる。

3　戦時体制下の西語部　一九四一―一九四四年

一九三七（昭和十二）年シナ事変（日中戦争）が始まって以来徐々に日本は戦時色が強まって行く。一九四一（昭和十六）年の二学期には、一九三九年に公布された国民徴用令に基づき西語部四年生の一部が特殊技能者として徴用されることになった。志願に基づき徴用された生徒は横浜郵便局などに配置され、スペイン語で書かれた国際郵便の検閲業務などを担当した。日米開戦直前の同年十月に突然政府は大学・専門学校の修業年限三か月短縮を決定した。徴兵時期を早めて日中戦争勃発後深刻化して来た将校不足を補うためであった。このため、翌年三月に卒業するはずの四年生は十二月に卒業することになった。徴用中の生徒も含め、年末に卒業した四年生には翌年早々入営する運命

が待ち受けていた。

戦争中の一九四二（昭和十七）年八月、東条英機内閣は専門学校・大学の修業年限六か月短縮を決定したので、四年生は半年繰り上げで九月に卒業することになった。この年から三年間九月卒業が続くことになる。翌四三年になると、学徒の勤労動員が実施され、生徒は軍需工場などで働くかたわら、授業を受けることになった。同年十月には理工科・教員養成以外の学生の徴兵猶予停止が決定され、十二月には徴兵延期制廃止による学徒動員（いわゆる学徒出陣）が開始された。同時に徴兵年齢が一年引き下げられ、十九歳となった。文科系である外語生は当然に徴兵猶予の特典は受けられなくなり、年齢が来れば兵役に就く事態となった。

三　東京外事専門学校時代

1　戦争末期　一九四四―一九四五年

一九四四（昭和十九）年四月、東京外国語学校は東京外事専門学校に改組された。この時期、文科・商科系の高等教育機関は無用なものとされて風当たりが強く、全国的にその改組・改称が当局から求められていた。旧姉妹校である東京商科大学も同年、東京産業大学と改称した。本学では今回も学内で校名改称に反対の声があったようだが、戦時下の「空気」に逆らうことはできなかった。前年から中等学校の英語の時間が削減され、戦時下に外国語を学んでいるということ自体、白眼視される雰囲気があった。大阪外語も同時に大阪外専となった。改称と同時に専門学校としては例外的に四年であった修業年限は三年に短縮され、四科の専攻別もなくなった。本科は東洋語を中心とする第

一部（支那、蒙古、タイなど九科）と西洋語の第二部（ドイツ、フランス、ロシヤなど五科）に分かれたが、西語部は西洋語であるにもかかわらず葡語部とともに第一部に含まれ、それぞれイスパニヤ科、ポルトガル科と改称した。地域原則に基づく区分である。教科課程では地理、歴史、民族及び文化の三科目を含む外事という科目が新設された。後に事情と呼ばれる科目に該当する。また、戦時体制を反映して教練、体錬（体操を改称）の時間が非常に増えている。しかし、この年の二月に政府は学徒を通年で勤労動員する方針を決定しており、すでに授業は行えない状況となっていた。五月末、外専は滝野川区西ヶ原町の新築校舎に移転したが、翌四五年四月米軍の空襲により校舎はほとんど焼失してしまった。本学としては実に三度目の校舎喪失であった。戦争中には多数の外語卒業生・生徒・教官が戦場に赴き、祖国のために犠牲となった者も多い。しかし、その正確な数字は不明であり、学園に慰霊のよすがとなるものは何もない。

高橋正武

2　終戦直後　一九四五―一九四九年

一九四五（昭和二十）年八月、終戦の日は勤労動員先の工場で迎えた生徒も少なくなかった。西ヶ原の校舎焼失後、東京美術学校など三か所に間借りしていた東京外事専門学校は、翌四六年九月に板橋区上石神井の旧東京工業専門学校附属電波兵器技術専修学校と私立智山中学校の二か所の校舎を借用し、授業を行うことになったが、出席率は非常

に低かった。学生たちは、戦後のインフレと食糧難の中、生活のためアルバイトに精を出しながら学業を続けなければならなかったからである。

苦しい生活状況は教える側も同様である。終戦直後の混乱期には西語部教官の異動が激しかった。一九四五年末、外専の専任教官は笠井鎮夫、高橋正武両教授と外国人教師ムニョスの三人だけであった。この不足を補うため、四六―四七年にかけて大林多吉（大十四卒）、宮城昇（昭十六後卒）、岡田辰雄（昭二十二卒）の三人が教官に採用されたが、大林教授と岡田講師は個人的な事情や病気のため相次いで短期間で辞職している。

永田教授が終戦の年に退官した後、スペイン文学専攻の伝統を受け継ぐべき人は高橋正武教授（一九〇八―一九八四）であったが、一九四七（昭和二十二）年に個人的事情で辞職している。高橋は岡山県出身で一九三一（昭和六）年卒業と同時に講師となって以来一六年間教職にあった。学界で活躍するのは、むしろ外語を退職後数年を経て大学教員に復帰してからである。南山大、ついで神戸市外大で教鞭を執るかたわらカルデロン、アラルコン、ベケルなどの作品を翻訳・紹介した。語学分野でも業績があり、とりわけ『スペイン広文典』（白水社、一九五一年、改訂版『新スペイン広文典』一九六七年）と『西和辞典』（白水社、一九五八年）は日本のスペイン語学界にとって大きな貢献である。イスパニヤ学会の会長も務めた。

一九四九（昭和二十四）年春、西ヶ原にようやく粗末ながら二階建ての木造校舎が一部完成したが、全学の移転がほぼ完了するのは一九五一（昭和二十六）年三月のことである。一九四九年に新制の東京外国語大学が発足し、外専はこれに包括されることになった。過渡期に当たる四八―五〇年にかけて会田由（昭二卒）、荒井正道（昭一三卒）の両教官が採用され、笠井、宮城とともに戦後の大学の基礎を築くことになる。一九五一年三月に最後の卒業生（外語創立時から数えて第五二期）を出して東京外事専門学校は廃止され、その七年間の歴史を終えた。

四　東京外国語大学時代

1　イスパニヤ学科から五部一類へ　一九四九―一九六一年

占領下の学制改革

敗戦の年一九四五（昭和二十）年八月から約七年間に及ぶ連合軍（実質的には米軍）の占領支配が始まった。占領下、連合軍総司令部（GHQ）は旧秩序の解体を目指して日本社会のさまざまな分野で上からの改革を強力に推し進めた。日本政府を通して巧妙な間接統治の形態をとったこともあり、国民はこれを甘受し、何らの抵抗もなかった。教育改革も進駐（占領）軍が推進した改革の一つであった。一九四七（昭和二十二）年三月に教育基本法・学校教育法が公布され、四月から六・三制への移行が開始された。旧制高校・専門学校・師範学校は旧制大学とともに新制大学（または暫定的に短期大学）に改編されることになり、翌四八年にはまず公・私立の新制大学一二校が誕生した。国立大学は、アメリカの州立大学に倣って各府県に一つ総合大学として設立する方針で、翌年五月全国に国立大学六九校が誕生した。

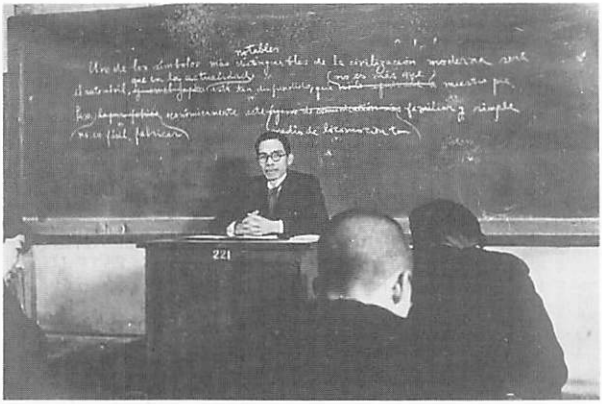
こうして一九四九（昭和二十四）年五月に新制の東京外国語大学が旧制の外事専門学校を包括しつつ発足した。当局には他大学と合併し、総合大学とする案もあったようだが、結局単科大学となった。大学の組織面では旧二部一四科が一二学科に改組され、イスパニヤ科はイスパニヤ学科となった。外専時代と同じく地域原則に基づく名称であった。その背景には外国語を中心にした地域研究を大学の柱としようとする意図があった。修学期間は四年で、専攻科

目は前期四八単位（一・二年各二四）、後期（三・四年）四〇単位、卒論一〇単位、計九八単位が必修であった。これに関連科目（後の専修科目）、一般教養科目、第二外国語および体育科目を合わせ、合計一七〇単位が卒業所要単位である。第二外国語は英、独、仏、露、中の五言語から一科目選択で、スペイン語はまだ入っていない。発足当時の外大では専攻科目つまり専攻語の授業が前期一・二年に各二四単位もあり、見かけ上は現在の倍になるが、これは週一回四五分の授業を二単位と計算していたためで、実際には今と同じく九〇分授業が週六回行われた。前期は学年制で、一年ごとに専攻科目の成績により進級する。この制度は今日まで続き、本学の特徴の一つとなっている。イスパニヤ学科の入学定員は戦前の外語時代と同じく三〇名でスタートしたが、翌五〇年には四〇名に増加した。

本学は、もともと物的な資産が乏しい上に、施設面でも人材面でも戦時中の痛手から立ち直っていない時期に急遽大学に昇格したので、多くの新制大学同様その名にふさわしい内容の充実を図るのは容易なことではなかった。戦後の外国語ブームもあって東京外大の入試は常に難関であり、とりわけスペイン語は高倍率であった。しかし、入学する学生の質に比して大学の内実が伴っているとは言い難い状態がかなり長く続いた。

五部一類への改編

一九五一（昭和二十六）年三月東京外専が廃止されたので、学校の組織は新制大学に一本化され、四月から学則改正により一二学科が七部に改編された。イスパニヤ学科は第五部第一類という学外にはわかりにくい名称に変わった。第一部（英米圏）から第七部（アジア圏）まで地域別に編成され、第五部はイベリヤ・南米圏に対応し、第五部第一類はイスパニヤ、第二類はポルトガルを対象とするものとされた。従前の学科と同じく地域原則に基づく区分であった。



授業中の笠井鎮夫（1941年頃）

今回の改正の特色は、専攻語学科目が前期三〇単位（一年一六、二年一四）と見かけ上は大幅に減ったことであるが、これは専攻語の単位数を週一回当たり四単位から二単位に計算するよう変更したためで、実際には一年は従来どおり週六回、二年は一科目減って週五回の授業となり、これに事情講義が各学年一科目加わった。単位計算上は専攻語よりも専修科目の比重が重くなった。また、後期三年からは語学・文学専修と国際関係専修のどちらかのコースを選択することになった。これは旧外国語学校時代にあった四科の区分の再編・復活とも言えるものである。後期専攻語学科目は専修により相違し、語文専修では卒論八単位を含み四八単位、国際関係専修は同じく卒論を含み四〇単位に縮小した。卒業所要単位は語文専修が一四六単位、国際専修が一五〇単位と表面上は削減された。第二外国語は一般語学科目と改称し、初めてイスパニヤ語が加わり、六言語となった。この時期の五部一類の教授陣は笠井鎮夫教授、会田由助教授、荒井正道講師、宮城昇講師、ホセ・ムニョス外国人教師の五人で、非常勤講師は一人もいない。

一九五二（昭和二十七）年四月、前年に結ばれた講和条約・日米安保条約が発効し、日本は沖縄と北方領土を除いたままようやく独立した。同年は旧制外専三年制から新制大学四年制への移行の狭間に当たったため卒業生はなかった。四月に学則改正が行われて後期に履修する専修科目がすべて語学・文学専修課程か国際関係専修課程のどちらかに分類され、志望する専修により選択できる専修科目が従来よりも制約されることになった。専修科目自体もかなり

増強されて種類が増えた。スペイン語科では発足時から一貫して国際関係専修を選択する学生が圧倒的に多く、語文専修は五三年の卒業生二四名のうち二、五四年二八名中〇、五五年二八名中一、五六年三五名中〇、五七年二八名中二にすぎない。

二クラス制の実施

一九五三（昭和二十八）年、五部一類は最初の新制大学卒業生二四名を社会に送り出した。一九五七（昭和三十二）年、スペイン語の入学定員は従来の四〇名から六〇名に大幅増員となった。新制大学発足時に比べ倍増したことになる。この年まで定員は仏、独、露、中と同じ横並びだったのにスペイン語のみが増えて英語（七〇名）に次ぐ大語科となったのである。この背景にはスペイン語の入学志願者が五〇年代以降激増していた事実があり、一九五五年には史上最高の入試倍率三七倍を記録している。定員増に対応して前期専攻語の授業は二クラスで行うようになった。この体制は現在も続いており、入学時に名簿順に従い学生はA（アー）とB（ベー）の二クラスに分けられる。前期二年間は、この専攻語クラスがホームルーム的役割を果たしている。一九六〇年日米安保条約改定に伴う安保闘争の嵐が学園にも吹き荒れた後、池田勇人内閣の所得倍増計画が始まり、日本は高度成長の波に乗って行く。スペイン語の就職は好調で、卒業生の大部分は商社・銀行・メーカーを中心とする企業に就職し、やがて海外勤務となる者が多かった。

新制大学の基礎がようやく固まったこの頃、一九五八（昭和三十三）年に笠井鎮夫教授（一八九五－一九八九）が退任した。岡山県出身で、一九一九（大正八）年卒業と同時に助教授に採用され、以後三七年間母校に在職した。一九二七（昭和二）年から約二年間スペイン・南米に留学している。終戦時に永田教授の後を承けてイスパニヤ科の主

任となり、戦後その建て直しに当たった。また、旧外専に四五年からわずか四年間だけ存続したフィリピン科（フィリピン語専攻は九二年に復活する）でタガログ語も担当している。プラスコ・イバニェス、ピオ・バロハなどスペイン現代作家の翻訳でも知られるが、実用語学に力を注いだ人で、入門書・教科書の分野での貢献が大きい。中でも『西班牙語四週間』（一九三三年、後に『スペイン語四週間』と改題）は今日まで六〇年以上も版を重ねている超ロングセラーである。同書は教科書としても使用された。戦後始まったＮＨＫラジオ・スペイン語講座の初代講師でもある。イスパニヤ学会創立時には理事長となり、その後会長も務めた。心霊学の研究家としても有名であり、独自の宗教的信念を持っていた。終戦直後の時期に教室で日本は世界最終戦争に敗れたわけではないと述べて学生たちを励ましたが、これが一部学生の反発をかい、占領軍に密告された。このため、総司令部に喚問される羽目となったが、スペイン語のできる米軍将校を相手に臆せずスペイン語で弁明し、公職追放の恐れもあった当時、結局何の咎めも受けなかったと言う。

女子学生の進出と最初の女性教官

戦後の教育改革で男女共学制の原則が布かれたため、東京外専も女子の入学を認めるようになり、全学を通じて最初の女子学生一名が一九四七（昭和二十二）年中国科に入学した。しかし、イスパニヤ科にはしばらくの間女子学生の入学がなく、大学昇格後の五一年に至って初めて北村（旧姓赤木）伸子、笠島（旧姓日原）真佐恵の二人が入学し、一九五五（昭和三十）年に卒業した。ただし、専修科ではすでに戦前に女子生徒の入学を認めており、西語部では一九三八（昭和十三）年当時、在籍していた女性がいる。

本学で最初の女性教官は、すでに戦前外国人教師の中にその例があるが、日本人としては一九五五年留学生別科が

委嘱した非常勤講師に始まる。スペイン語では一九六二（昭和三十七）年四月に野々山ミチ子（昭三二卒）が非常勤講師となり、翌年四月助手に採用された。一九六二年にはドイツ語学科で佐藤洋子助手が採用されていたので、野々山は専任としては二番目の女性教官であり、ともに大いに注目を集めた。しかし、後に二人とも本学から転出した。現在、全学教官の中で女性は二〇パーセント程度を占めているが、スペイン語専攻ではその後外国人教師を除き専任の女性教官は途絶えている。

大学の初期には一割以下であった女子学生が全学的に増え始めるのは昭和四十年代以降である。一九七三（昭和四十八）年にはスペイン語学科入学者六一名中、女子学生が三四名で、初めて過半数を占めた。その後多少の変動があったが、共通一次試験が実施された一九七九（昭和五十四）年以降、全学的に女子大化の傾向が定着する。スペイン語では八一年以降、常に女子の比率が男子を上回るようになった。それが最大に達したのは一九九〇（平成二）年で、入学者七五名中女子が六五名（八七パーセント）を記録し、スペイン語学科は全学中でもとりわけ女子比率の高い学科となった（全学入学者中の同比率は六五パーセント）。この傾向は現在まで続いており、一九九八（平成十）年度の場合、スペイン語専攻入学者七〇名のうち女子は五六名（八〇パーセント、全学では六七パーセント）である。スペイン語の女子学生は、数が多いこともあって学内では目立つ存在であり、卒業後も社会のさまざまな分野にめざましく進出している。

学会の創設とスペイン語教育界の拡大

一九五五（昭和三十）年十二月、瓜谷良平（昭十六後卒、拓殖大）、宮城昇、水谷清（大九卒、拓殖大）らの尽力により日本イスパニヤ語学会が創立された。初代会長は永田寛定、理事長は笠井鎮夫であった。学会創設を契機によ

うやく日本のスペイン語学界でも実用スペイン語と文学作品の翻訳だけの段階を脱して、言語と文学を学問として研究しようとする気運が高まって来た。創立当初は東京外語と大阪外語の同窓生が会員の大部分を占めていたが、次第に出身大学も多様化し、会員数も増加した。会員の専攻分野も語学・文学に限らずさまざまの分野に多様化して来たので、一九七五（昭和五十）年に日本イスパニヤ学会と改称した。現在、会員数は約四〇〇名で、機関誌『Hispánica』を発行する。その後、特に中南米地域を研究分野とする学会としてラテン・アメリカ政経学会（機関誌『ラテン・アメリカ論集』）が一九六四年に創設され、さらに一九八〇年には日本ラテンアメリカ学会（機関誌『ラテンアメリカ研究年報』）が設立されている。

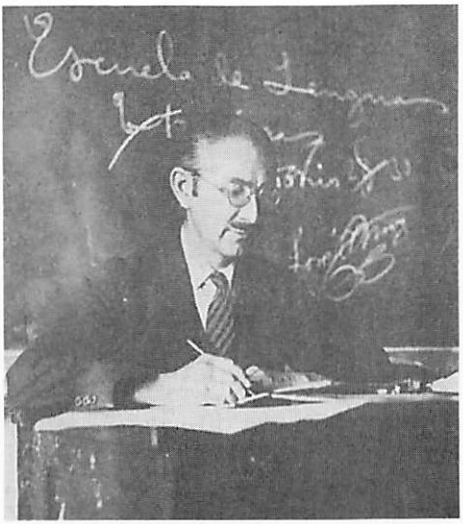
学会が間口を広げて行く一方で、特定分野の研究会活動も次第に活発となる。その先駆けと言うべきものは一九七五年十一月本学で原誠の首唱により創立された東京スペイン語学研究会である。現在は、本学だけではなく首都圏の多数の大学関係者・院生も会員に加わり、毎月研究会を開くとともに機関誌『スペイン語学研究』（一九八六年創刊）を発行している。前年発足した関西スペイン語学研究会（機関誌『Lingüística hispánica』）とともに語学研究上で果たして来た役割は大きい。

スペイン語圏関係の研究者が増加した背景にはスペイン語専攻の課程を持つ大学が戦後激増したことがある。戦前からスペイン語を第二外国語として教える教育機関は高等商業学校を中心にかなりあったが、専攻課程を持つのは東京外語のほかに大阪外国語学校（一九二一年創立時に語部開設）と私立の天理外国語学校（二六年語部開設）しかなかった。しかし、戦後は中南米諸国との通商関係が盛んになってスペイン語専攻者の需要が増大したことや、それに伴ってスペイン語圏への文化的関心も高まったことにより上智大学（五八年）を皮切りに公・私立大学の主に外国語学部の中に相次いでスペイン語（イスパニア語）学科が設置されるようになった。特に一九六〇年代は新設ラッシュ

で、南山大（六〇年）、清泉女子大（六一年）、神戸市外大（六二年）、京都外大（六三年）、神奈川大（六五年）、関西外大（六六年）、愛知県立大（六八年）と続いた。これらの学科の創設時には本学の卒業生がスタッフに加わった例も多い。なお、外国語学部系ではない地域研究の専攻課程としては一九八〇年東大教養学部教養学科に中南米分科が設置されている。

2　スペイン科からスペイン語学科へ　一九六一―一九九五年

スペイン語学科への改編



教室で作文添削中のホセ・ムニョス（昭和初期）

一九六一（昭和三十六）年四月、学則改正により七部類は地域名を付した一三科に改編された。第五部第一類はスペイン科と改称した。しかし、三年後の六四年四月にスペイン科はスペイン語学科となった。六一年から六三年にかけてスペイン科に入学した学生たちは何の説明もないままスペイン語学科を卒業することになった。名称の上では大学発足時と同じく学科が復活するとともに戦後初めて学科名が地域原則から言語原則による名称に変わったことになる。また、言語名が昔の南蛮文化の伝統を引き継ぐ「イスパニヤ語」ではなく英語式の「スペイン語」に変わったことも注目される。続い

て六五年にも学則改正が行われてこれまで語文専修と国際専修で相違のあった卒業所要単位がともに一四六単位となった。もう一つ目立つのは、専攻語学科目の単位数が減ったことで、前期一年は一六単位から一四単位、二年は一四単位から一二単位に縮小した。しかし、これは事情科目を従来の一科目四単位から二単位に改変したためで見かけ上の変化にすぎない。スペイン語学科に改称した六四年四月当時の専任スタッフはスペイン文学講座の会田由、荒井正道、長南実（昭一六後卒）、野々山ミチ子、スペイン語学講座の宮城昇、原誠（昭三一卒）、スペイン事情講座の花村哲夫（昭六卒）、外国人教師ホセ・ムニョスの計八人で、ほかに非常勤講師が五人（うち外国人一人）委嘱されている。

スペイン文学専攻の会田由教授（一九〇三―一九七一）は、一九六五年三月に退任した。個人として初のドン・キホーテ完訳（『ドン・キホーテ前編』筑摩書房世界文学大系一〇、一九六〇年、『ドン・キホーテ後編』同世界文学大系一一、一九六二年）を達成したことで特に知られる。それ以外にも古典のアラルコンから現代のロルカまで四〇編以上にわたる多数の文学作品を翻訳・紹介したほか、スペイン文学および文学史についての論考もある。熊本県出身で、外語卒業後、東京帝大図書館の司書を長く務めたが、戦争末期に軍属としてジャワに派遣され、戦後は一年あまり現地で抑留生活を送った体験を持つ。諧謔精神に富み、酒を愛する人でもあった。

大正初期にエスパーダについで第四代の外国人教師となったホセ・ムニョス・ペニャルベル（一八八七―一九七五）は一九六六（昭和四十一）年に退任した。ムニョスは一九一七（大正六）年にスペインから着任し、戦中・戦後の苦難の時期を挟んでほぼ半世紀もの間外語に勤務し、その間一度も母国に帰らなかった。日本人と結婚し、晩年日本に帰化したが、学生の前では決して日本語を話さず、スペイン人の生活様式を守り通した。常に温厚で、ユーモアのある紳士であった。バレンシア出身で、マドリード大学卒業後、歴史学の研究者として将来を嘱望されたが、有名

な文献学者アメリコ・カストロ Américo Castro の推薦で来日した。着任後は著作を残すこともなく、もっぱらスペイン語教育に専念し、そのかたわら戦前からＮＨＫの国際放送の業務にも携わった。一九七五（昭和五十）年日本の土と化したが、翌年遺徳をしのぶ卒業生有志の募金によって横浜外人墓地に追慕記念碑が建てられた。

後任の外国人教師にはフェルナンド・サンチェス・ドラゴ（スペイン）が一年間在任した後、一九六八（昭和四十三）年からエンリーケ・コントレラス（同）が第六代の外国人教師となった。

大学院創設

一九六〇年代に始まった高度経済成長によって日本は目に見えて豊かになった。そういう時代を象徴する東京オリンピックが一九六四（昭和三十九）年に開かれ、外大生も多数、通訳等のアルバイトで参加した。一九六六（昭和四十一）年四月、本学に大学院外国語学研究科修士課程（修業年限二年）が新設された。この課程にはゲルマン系、ロマンス系、スラブ系、アジア第一、同第二、同第三の六言語専攻が設けられ、その中の一つとしてロマンス系言語専攻（スペイン語）が設置された。スペイン語関係の専攻を持つ大学院は本学が最初であり、六七年神戸市外大、六八年大阪外大と続いた。二年後の六八年に布施温、清水透、杉山武の三人が修了し、スペイン語学専攻初の文学修士となった。大学院が設置されたことにより一九五三（昭和二十八）年専攻生として制度的に出発した外国語専攻科（修業年限一年）は廃止された。同時に学部組織が学科目制から修士講座制に変更された。語学・文学と並んで本学の学問的伝統を支えるもう一つの柱は地域研究であるが、大学院に地域研究研究科が設置されるのは一一年後の一九七七（昭和五十二）年のことである。

大学院が創設されたことによって本学ではようやく研究者育成の体制が整い、創立以来初めて教授陣の後継者を養

成する組織的なコースが確立することになった。大学院新設を契機に教官たちの間では以前にもまして研究重視の雰囲気が高まり、実用中心の傾向が強かった本学の伝統にも変化の兆しが現れ始めた。同時に大学改革の気運も高まったが、それが実を結ぶ前に大学は紛争の渦に巻き込まれることになった。

学園紛争の時代

一九六八（昭和四十三）年は世界的に学生運動が燃え上がった年である。西ドイツ、フランス、イタリア、アメリカなどで学生運動が激しくなった。先進国ばかりではなく、メキシコ、ブラジルなどでも学生運動が過熱した。学生運動の闘争目的はさまざまであったが、どの国でも生活水準が大戦後のどん底から脱却し、戦後のベビー・ブーム世代が大学に押し寄せてその大衆化が進んだ点では共通していた。国際政治面ではヴェトナム反戦運動の高揚、中国文化大革命の激化などの背景があった。

日本ではこの年の初めに東大紛争、ついで日大紛争が本格化した後、学園紛争の嵐が爆発的に全国の大学に広がった。戦前から本学は学生運動の比較的盛んな学校であり、戦後は一層それが顕著となる。しかし、この時期の学園紛争は全国的な広がりと全学を巻き込む深刻さという点で前例のないものであった。多くの大学で反代々木（反日共）系の活動家学生を中核に一般学生も組織化した全学共闘会議（全共闘）が結成され、闘争の主導権を握った。本学では六八年六月に学寮の建て替え計画に伴う新寮の管理規定をめぐって学園紛争が始まる。十月に全共闘が学園自主管理を唱え校舎を封鎖したので、大学は休校状態となった。十二月に講堂で行われた全学討論集会は全共闘の大学当局に対する「大衆団交」の場となり、教官たちは三日間にわたって拘束され、つるし上げを受けた。翌六九年三月に至って、大学は機動隊を導入、封鎖を解除して大学を立入禁止とした。この年、東大入試は中止となったが、本学の入

試は学外四か所の会場で行われた。四月から学園の正常化が図られ、学外各所で授業が再開されたものの、一部学生による授業妨害が頻発する。しかし、十月からは学内で授業が行われるようになった。

一九七〇（昭和四十五）年は、新学期の授業が六月から遅れて始まり、これ以降次第に授業は正常化して行くが、紛争中に表面化した代々木系と反代々木系間、反代々木系諸セクト間の対立はかえって激しくなり、暴力事件（内ゲバ）が頻発した。紛争の火種となった日新寮問題は、その後付近住民まで巻き込んでくすぶり続け、寮生と大学間の訴訟問題に発展する。結局、一九七六（昭和五十一）年三月に学生寮は廃止され、半世紀にわたるその歴史を閉じた。その後、一九八〇（昭和五十五）年七月にサークル棟移転問題をめぐる紛争で機動隊が出動したのを最後に暴力的な学生運動はほとんど姿を消すに至った。

学園紛争中はスペイン語学科にも闘争の嵐が吹き荒れ、学生の中にはリーダー格の人物もいた。紛争に対する教官の対応はさまざまであった。「ゲバ棒」にヘルメット姿で時には暴力も辞さない学生集団の前では教師の権威も吹き飛び、だれもがそれぞれ固有の人格をさらけ出すしかなかった。一部の学科・系列では教官が全共闘学生に同調し（造反教官と呼ばれた）、他の教官と敵対するような事態も生じた。大学に不満を持つ者同士の共鳴現象と言うべきであろう。しかし、スペイン語学科ではこのような無残な情景は見られなかった。

紛争後の大学

紛争の被害は大学のあらゆる面で大きく、後遺症が残った。一九六八（昭和四十三）年半ばから二年間近く教育・研究が中断状態となったため、この時期に在学した学生は戦時中とほとんど同様に十分な教育を受けられなかった。学生に占拠された校舎・研究室の荒廃はひどく、学生・教職員の中には暴力事件で負傷した者、過労・心労で病に倒

れた者、紛争中に辞職・転出した教官も少なからずいた。負傷しないまでも心に傷を負った関係者は少なくなかったはずである。その一方で、終戦後と変わらないなし崩しの転向現象もまた顕著だった。つい先日まで「授業粉砕」を叫んでいた学生が授業が再開すると単位認定を教官に要求する風景が見られた。一方、教官の側でも紛争中の言動・行動は一切問わないという合意ができ上がった。紛争中はどの大学でも大学改革が熱心に論じられ、さまざまの構想が打ち出されたが、実現したものは少なかった。紛争後、本学で目に見えて変わったのは建物で、戦災復興期の遺物である木造校舎は姿を消し、代わりに統一性のないコンクリート建築が狭いキャンパスに立ち並ぶようになる。こうして表面上大学は元に戻り、全共闘が主張した「大学解体」は実現しなかったが、紛争後見えない深層で大学は変質し始めた。

一九七一（昭和四十六）年四月、改革の一環として学則が改正され、卒業所要単位は一四八単位となり、以前より微増した。前期専攻語学科目は見かけ上は三六単位から二四単位（一・二年各一二）に縮小したが、これは事情科目が分離したためで、実質的には二年が二単位分増え、一・二年とも週六回の授業となった。この体制は現在まで続いている。また、一般教育科目の選択制限が大幅に緩められた。さらに、一九七八年四月に学則改正があって卒業所要単位が後期専攻語学科目と専修科目から各四単位減って合計一四〇単位になったが、演習科目を従来の四単位から二単位に計算することになったため実質的には変化がない。戦前の外語は進級の厳しい学校であったが、戦後もその伝統は前期の学年制の中で受け継がれて来た。スペイン語の一・二年生は毎年入試発表のときとあまり変わらない気分で恐る恐る学年末の進級者発表を見に行ったものである。紛争後、学科によってはこうした伝統がすっかり緩んだところもあるが、スペイン語ではほとんど変化がなかった。

紛争後、国立大学の入試制度は、大きな改革が行われた。新制大学の発足以来、国立大学の入試は二期に分けて実

施され、本校は二期校に属してきたが、受験界における一期校と二期校の格差解消を主な目的として一九七九（昭和五十四）年から全国の国立大学で共通一次試験が導入されることになった。しかし、これにより改革の意図とは裏腹に大学の序列化が加速することになった。それまでは漠然としていた大学間の受験上の格差が同じ土俵上で比較可能になったからである。その結果、格差は解消するどころか、受験界における地方国立大学の凋落がとりわけ著しく、全般に国立大学の評価が低下した反面、大都市の私大人気が高まった。受験生は、徹底した受験指導の下、偏差値により振り分けられ、学力相応の大学を選ぶ傾向が強くなった。それにより外語でも七〇年代まで入学者の過半数を占めていた浪人が減って現役の入学者が増えるとともに女子の比率が激増するようになる。一九九〇（平成二）年から共通一次試験に代わって入試センター試験が実施されるようになったが、本質的な変化は起きていない。

為替の完全自由化が行われた一九六〇年代後半以降、日本人の海外旅行が盛んになり、これと軌を一にして語学研修や旅行を目的とする学生の海外渡航も盛んに行われるようになった。公費留学の面で特筆されるのは、一九七一（昭和四十六）年に始まったメキシコ政府の交換留学制度で、初期には年間百名も採用したので、恩恵を受けたスペイン語学科の学生は多数に上った。

紛争の時代から脱却しようとするこの時期、河村功（昭六卒）を中心とする卒業生の努力で『東京外語スペイン語部八十年史』（東京外語スペイン語同学会、一九七九年）、同『別巻』（一九八一年）が編まれたことも特筆しなければならない。スペイン語科同窓生の歴史を振り返ろうとする試みが、語科開設以来初めて実現したのである。

スペイン語学科教授陣の拡充

旧制外専が大学に吸収された一九五一（昭和二十六）年当時五人であったスペイン語学科の専任スタッフは次第に

増え、それと連動しつつ学生定員も増えた。一九八〇（昭和五十五）年に専任教官は一〇人に達し、以後今日まで一〇人体制が続いている。入学定員は七九年に六〇名から七〇名に増加し、英米語学科と並び学内最大となった。これに次ぐのは六五－六六年以降スペイン語学科と並んでいた仏・独・露・中の四語学科（六〇名）である。専任教官の中で外国人教師は一九七七年から二名となり、スペイン人と中南米人を一名ずつ採用する慣行が続いている。中南米出身の最初の外国人教師は同年就任したギリェルモ・ヨシカワ（ペルー）であった。専任が一〇人体制となった一九八〇年四月当時の教授陣はスペイン語学講座の宮城昇、原誠、上田博人（昭五十卒）、スペイン文学講座の長南実、牛島信明（昭四十二卒）、スペイン事情講座の野間一正、中南米事情講座の清水透（昭四十一卒）、髙橋正明（昭四十六卒）、外国人教師のエンリーケ・コントレラスおよびアンヘル・ブラーボの計一〇人である。大学発足時には皆無であった学科の非常勤講師も授業科目の拡充に伴って次第に増加し、この年には一〇人（うち外国人一名）を数えるようになった。

紛争末期の一九六九（昭和四十四）年に花村哲夫教授が急逝したが、その後七八年から八三年までの間に荒井正道、宮城昇、長南実の各教授が停年退官し、学科では戦前・戦中に旧制外語を卒業した教官がすべて大学を去った。一九七〇年に採用された中川文雄講師（中南米事情）はスペイン語学科専任教官としては初の他大学出身であったが、助教授時代に他大学に転出した。これらのポストは、牛島信明（スペイン文学）、髙橋正明（中南米事情）、寺崎英樹（スペイン語学、昭四十卒）、桑名一博（スペイン文学、昭三十一卒）など戦後卒業の世代が占めるようになった。その後、平成に入って一九八九（平成元）年から九一年までの間に野間一正、桑名一博の両教授が退任し、若い世代では上田博人助教授と清水透教授が他大学に転出した。

花村哲夫教授（一九〇七－一九六九）は岐阜県出身で、笠井の伝統を引き継ぎ、商業通信文や経済関係の文献講読

を担当した。授業とその評価が厳しい教官として有名で、特に新入生には恐れられた。本学卒業後、交通公社に勤務した経験があり、一九五七（昭和三十二）年に小樽商科大学から転入して一二年在任した。

宮城昇教授（一九一九－一九九八）は東京市出身、卒業と同時に入営した世代に属し、終戦後復員して教職に就き、三六年近く在任した。スペイン語学専攻で、『基礎スペイン語文法』（白水社、一九五八年）などの入門書のほか『スペイン基本語辞典』（白水社、一九七二年）、『和西辞典』（白水社、一九七九年）、『現代スペイン語辞典』（白水社、一九九〇年）などの辞書編纂で監修者あるいは共著者として中心的な役割を果たした。学生に「仏の宮城」と言われた温厚篤実で、謙虚な人柄であった。イスパニヤ学会創立者の一人であり、理事長・会長も務めている。

博士課程設置

一九六六（昭和四十一）年に設立された大学院は研究者育成のため大いに貢献して来たが、修士課程だけではその目的のために不十分であるという声が強まるようになった。一九九二（平成四）年四月、ようやく大学院地域文化研究科博士課程が新設され、従来の外国語学研究科と地域研究研究科は一本化された。修士課程に相当する博士前期課程（二年）は七専攻に分かれ、スペイン語関係はヨーロッパ第二専攻に含まれることになった。博士後期課程（三年）は地域文化専攻という単一の課程であり、修了者には学術博士の学位が授与される。後期課程の発足当時、スペイン語学科関係で授業を担当したのは原誠（スペイン語言語論演習Ⅰ）、寺崎英樹（同Ⅱ）、牛島信明（スペイン言語文化論演習）、清水透（ラテンアメリカ歴史社会論演習）であった。新しい地域文化研究科は名称どおり地域原則による組織であるが、前期・後期とも言語文化コースと地域研究コースに分かれている。前期課程にはその他に国際交流専修コースが新設された。

3　欧米第二課程スペイン語専攻への改編　一九九五年―現在

学部改革と七課程への改編

一九九二（平成四）年、文部省が大学設置基準を改正して規制を緩和し、大学改革を推進する方針を示したことを契機に全国の大学で教養部改組を中心とする大学改革が急速に進むようになった。本学では一九九五年四月に大学発足時以来の大きな学部改革が行われ、従来の一四学科が解体され、七課程・三大講座に改組された。改革の目的の中には専門性の重視と語学科の壁を崩すということが謳われていた。七課程は地域原理に基づき分けられたが、スペイン語学科はフランス語、イタリア語、ポルトガル語とともに同じ課程に改編され、欧米第二課程スペイン語専攻と称することになった。学生は後期三年から従来の語文と国際関係の二専修に代わって言語・情報、総合文化、地域・国際の三コースのいずれかを選択することになった。卒業単位は従来の一四〇単位から一二六単位に縮小され、必修単位も削減された。専攻語学科目は主専攻語科目と改称され、前期二四単位（一年一二、二年一二）の必修は変わりないが、専攻語の前期事情は地域基礎科目、後期専攻語学科目は地域専門科目と改称され、合わせて二〇単位必修に削減された。

大学発足後行われた教科課程の改革は、一貫して必修科目を減らして卒業所要単位を縮小し、学生の負担軽減を図るという方向で進められてきた。今回は特に後期専攻語が各学年一科目のみ必修（計八単位）と削減された。また、科目選択の自由を広げるとともに専門性の強化を目指すというある意味で矛盾する目標が追求されたと言える。こうした改革の方向が果たして成功しているかどうかは、卒業生に対する社会の評価を考慮しながら今後再検討する必要

があるだろう。

スペイン語専攻の現在

学部改革により教育母体としてのスペイン語専攻は残されたが、学科は消滅した。外国人教師を除く全教官が三大講座（言語・情報、総合文化、地域・国際）のいずれかに分属することになった。これは従来学科内にあった語学、文学、事情の三講座の区分にほぼ対応する。一九九八（平成十）年現在、スペイン語専攻の担当教官八名は言語・情報講座に寺崎英樹教授（スペイン語学）、高垣敏博教授（同上）、川上茂信講師（同上、昭六十卒）、総合文化講座に牛島信明教授（スペイン文学）、杉浦勉助教授（スペイン語圏文学、昭五十四卒）、地域・国際講座に高橋正明教授（ラテンアメリカ民衆運動）、立石博高教授（スペイン史、昭五十一卒）、安村直己講師（メキシコ史）が所属する。改革後の一九九六（平成八）年には三八年間在任した原誠教授（スペイン語学、言語・情報講座）が退官している。

外国人教師では二九年間その任にあったエンリーケ・コントレラス客員教授が一九九七（平成九）年に辞任した。一九九二年以降、文部省の方針もあって国立大学で新たに採用される外国人教師は短期間で交代することになったので、コントレラスやかつてのムニョスのように伝説的な名物教師が今後現れる可能性はほとんどなくなった。後任のスペイン人教官としてはビクトル・カルデロン・デ・ラ・バルカが就任している。もう一人の外国人教師は、アンヘル・ブラーボ（スペイン）が一九八五年に退任した後、マリーア・アンヘリカ・ロドリゲス（チリ）、ドロレス・ヤニェス（メキシコ）、シルビア・ノベーロ（同）、ニーナ・リュイ・デ・ハセガワ（同）といずれも中南米出身の女性教官に引き継がれ、一九九八年からはやはり女性のグラシエーラ・クラビオート（同）がその任にある。

非常勤講師は、スペイン語専攻および副専攻スペイン語のために現在一一名（うち外国人二名）が委嘱されている。

新制大学になってからカリキュラムが多様化したため非常勤スタッフへの依存度は飛躍的に高まり、その貢献も大きい。大学発足以降一九九八年度までにスペイン語学科が委嘱した歴代の非常勤講師は八〇名以上（うち外国人六名）に上るが、その大半は、いわゆる事情関係の科目担当者である。戦後、一五年以上の長期にわたり出講した講師は橋本定久（時事スペイン語）、増田昭三（ラテンアメリカ歴史文化論）、ヘスス・マロート（スペイン語作文）、倍賞和子（ルーマニア語）、杉山晃（ラテンアメリカ文学）、後藤政子（中南米現代史）、戸門一衛（現代スペイン社会経済構造論）の各氏である。

受験人口の増大に対処するため、一九八六（昭和六十一）年以降文部省の要請に基づき本学でも臨時増募が行われることになった。スペイン語の入学定員は、同年七〇名から七二名に増員、八七年には七四名、八八年からは七五名に増加した。前期一・二年は二クラス体制が続いてきたが、スペイン語は学内でも有数の留年の多い学科であるため、増募の時期、専攻語の授業では一クラスに五〇名近い学生がひしめき、およそ言語教育には不適な環境が生じた。この事態は今もあまり改善されていないが、若年人口が減る時期に入って臨時増募が終了したので、入学定員は一九九八年から旧に復し七〇名となった。

かつてはかなわぬ夢にすぎなかった学生の海外渡航は、今や少しも珍しいことではなくなった。単位互換が認められる公的な留学制度としては一九九六（平成八）年にセビーリャ大学と、九七年にはポンペウ・ファブラ大学（バルセローナ）と交流協定が締結され、本学から毎年数名の学生を送り出すとともにスペインからも留学生を受け入れている。

戦後から現在までの教材と辞書

終戦直後は、スペイン語の辞書も学習書も市販されておらず、古書店で見つけるしかなかった。大学で使用されるスペイン語教材は、一九五〇年代から初級教科書が出版され始めて次第に種類が増えるとともに、洋書も入手が可能になった。中級以上の教材の多くは、タイプした原紙を用いる謄写版プリントが長い間使用されたが、七〇年代からはフォトコピーが多用されるようになる。現在は録音教材に加えてビデオ教材も利用され、また教育・研究にパソコンが活用される例も増えている。しかし、大学全体の情報処理体制はまだ立ち後れており、府中への校地移転が予定される二〇〇〇年以降の進展が期待される。

辞典に目を向けると、戦後初の本格的辞典と言えるのは高橋正武『西和辞典』（白水社、一九五八年）である。今日から見れば、用例がほとんどないなどの欠点はあるものの、語数が多いコンパクトな辞典であり、長い間、戦前の村岡西和にとって代わる事実上唯一の西和辞典であった。戦後スペイン語を学んだ人でこの辞典の恩恵を受けなかった人はないと言ってよい。その地位は、瓜谷良平『絵入りスペイン語辞典』（大学書林、一九六九年）やいくつかの小辞典が出版された後も揺るがなかった。しかし、平成期に入って、これに代わる新しい西和辞典が相次いで出版されるに至った。桑名一博編『小学館西和中辞典』（一九九〇年）、宮城昇、山田善郎編『現代スペイン語辞典』（白水社、一九九〇年）、カルロス・ルビオ、上田博人編『新スペイン語辞典』（研究社、一九九二年）などである。いずれも用例を多数取り入れた学習辞典のタイプであり、スペイン語を学ぶ者には辞典の選択の幅が広がった。和西辞典としては田井佳太郎（明四二中退、ペルーへ移住し、戦時中日本へ送還）の『和西小辞典』（大学書林、一九六二年）、『和西大辞典』（同、一九六四年）および『和西中辞典』（同、一九六八年）のシリーズが著者の死後出版されたが、その後十余年を経て、宮城昇、E・コントレラス他編『和西辞典』（白水社、一九七九年）が刊行され、今日まで標

準的な辞典となっている。

一般向けのスペイン語学書および古典から現代に至るスペイン・中南米文学の翻訳出版は戦後非常に活発となった。他方、語学・文学以外の領域では、戦前から日本ではスペインよりもむしろ中南米に研究上の関心が向けられてきた。戦前は移民、戦後は貿易を中軸とする中南米との関係が重要だったからである。日本が経済発展を遂げる一九六〇年代以降は、とりわけ政治・経済を中心とする中南米の地域研究が盛んになった。しかし八〇年代以降、研究対象となる地域や分野はますます多様化し、研究水準も上がっている。こうした事情を反映してスペイン語圏の言語・文学のみならず歴史・文化・社会科学など多分野にわたる専門書の出版も著しく盛んとなって現在に及んでいる。

［本稿の執筆に際して、桑名一博、浅香武和の両氏から一部資料の提供をいただき、故宮城昇氏には長時間にわたる面談に応じていただいた。また草稿の段階で荒井正道、長南実、原誠、中嶋嶺雄、河村功、鈴木洪三、岡妙子、山本唯雄の各氏からさまざまの御教示・御指摘をいただいた。記して謝意を表する。］

歴代スペイン語科関係教官一覧

○一九九九（平成十一）年八月末現在でスペイン語科（現スペイン語専攻）に所属する専任教官および語科を通じて委嘱した非常勤教官を就任順に配列した。旧制時代の講師は非常勤講師の中に含めた。

○一九四九（昭和二十四）年以降は特記しない限り新制大学の教官を示す。

○専任となった非常勤教官の在職期間は、専任教官の部で併せて示した。

○資料の不備のため、特に非常勤教官については脱漏または在職期間が不正確な場合があり得る。

○外国人教師の氏名のカタカナは姓・名の順、氏名の後の（　）は国籍を示す。

○氏名の太字は現職教官を示す。

――専任教官（日本人）――

桧山剛三郎　明三〇、九附属外語助教授→明三二、四外語助教授→三三、一〇辞任

金沢一郎　明三三、一二助教授→四〇、一辞任　大五、一講師→八、五教授→昭一五、三退任

村上直次郎　明三三、七教授→四一、七校長→大七、九転任

篠田賢易　明三二、一〇講師→三三、一一教授→大七、一二没

永田寛定　明四二、四講師→大七、七教授→昭二〇、五退任　昭二〇、五講師→二十、九退任

日比文哉　大六、四講師→七、七助教授→一二、九辞任

笠井鎮夫　大八、四助教授→昭四、三教授→二四、六外大教授→三三、三退任　昭三三、六名誉教授

高橋正武　昭六、四講師→七、三助教授→一六、三教授→二二、六辞任

馬場称徳　明四〇、四講師→四〇、一一退任　大一二、一二講師→昭一六、七教授→一八、三、退任

大林多吉　昭一八、三講師→一九、三退任

宮城　昇　昭二一、八外専講師→二二、六外専教授→二四、一一辞任

昭二一、八外専講師→二四、六外専講師兼外大講師→二六、三外大講師→三〇、一〇助教授→三八、四教授→五七、四退任　昭五七、四名誉教授

岡田辰雄　昭二二、四外専講師→二三、四辞任　昭四四―四五非常勤講師

会田　由　昭二三、八外専講師→二五、四外専講師兼外大講師→二五、七外専教授兼外大講師→二六、三外

荒井正道　大助教授→三〇、四教授→四〇、三辞任、昭四〇―四一非常勤講師
昭二五、一外専教授→二六、三外大講師→二八、七助教授　→三七、四教授→五三、四退任
昭五三、四名誉教授

花村哲夫　昭三二、九助教授→三三、四教授→四四、一二没

原　誠　昭三三、四助手→三七、四講師→四〇、四助教授→五〇、四教授→平八、三退任　平八、五名誉教授

野々山ミチ子　昭三七―三八非常勤講師　昭三八、四助手→四一、四講師→四五、六辞任

長南　実　昭三八、四助教授→四一、四教授→五八、四退任

清水　透　昭四三、四助手→四八、四講師→五二、四助教授→六二、四教授→平五、三辞任、平五―八非常勤講師

中川文雄　昭四四―四五非常勤講師　昭四五、二講師→四六、四助教授→五一、五転任　昭五二―五五非常勤講師

野間一正　昭四五―四七非常勤講師　昭四七、四助教授→五三、四教授→平三、三退任

上田博人　昭五二、四助手→五七、四講師→六三、四東大教養学部出向→六三、七助教授併任→平一、三転任

牛島信明　昭五三、四講師→五四、四助教授→六〇、四教授→

高橋正明　昭五五、四助手→五七、四講師→六二、四助教授→平五、四教授→

寺崎英樹　昭五七、四助教授→六三、六教授→

桑名一博　昭五八、四教授→平五、三辞任
川上茂信　平一、四助手→八、四講師→
立石博高　昭五八―五九非常勤講師　平四、四助教授→七、四教授→
杉浦　勉　昭五六―五九非常勤講師、平五、四助教授→
安村直己　平七、四講師→
高垣敏博　平八、四教授→

――専任教官（外国人教師）――

グリソリア、フランシスコ Francisco Grisolia（スペイン）明三〇、一二附属外語教師→三二、四東京外語教師→三六、七退任
サピーコ、エミリオ Emilio Zapico（スペイン）明三六、一〇教師→三九退任
ヒメネス・デ・ラ・エスパーダ、ゴンサーロ Gonzalo Jiménez de la Espada（スペイン）明四〇、一教師→大五、三退任　大五、四講師→五、七退任
ムニョス・ペニャルベル、ホセ José Muñoz Peñalver（スペイン）大六、一教師→昭四〇、一〇客員教授→四一、三退任
サンチェス・ドラゴ、フェルナンド Fernando Sánchez Dragó（スペイン）昭四二、四教師→四三、三退任
コントレラス・ロペス、エンリーケ Enrique Contreras López（スペイン）昭四三、四教師→四六、四客員教授　平九、三退任

ヨシカワ・トレス、ギリェルモ Guillermo Yoshikawa Torres（ペルー）昭五二、四教師→五四、三退任
ブラーボ・メンディオーラ、アンヘル・ホアキン Ángel Joaquín Bravo Mendiola（スペイン）昭五四、四教師→六〇、三退任
ロドリゲス・マダリアーガ、マリーア・アンヘリカ María Angélica Rodríguez Madariaga（チリ）昭六〇、四客員教授→六三、三退任
ヤニェス・エンリケス、ドロレス Dolores Yáñez Enríquez（メキシコ）昭六三、四客員助教授→平二、三退任
ノベーロ・ウルダニビア、シルビア Silvia Novelo Urdanivia（メキシコ）平二、四客員助教授→三、四客員教授→七、三退任
リュイ・デ・ハセガワ、ニーナ Nina Lluhí de Hasegawa（メキシコ）平七、四客員助教授→一〇、三退任
カルデロン・デ・ラ・バルカ、ビクトル Víctor Calderón de la Barca（スペイン）平九、四客員助教授→
クラビオート、グラシエーラ Graciela Cravioto（メキシコ）平一〇、四客員助教授→一一、四客員教授→

――旧制講師および新制非常勤講師（日本人）――

甘利造次　明三四―三五、大一二　平松輝太郎　明四〇―四五
広中強介　明四一―四二　田中（旧姓沼田）豊吉　明四二―大二
村岡　玄　明四三―四四、大三―五　妹尾正男　明四五―大三
藤谷覚三郎　大九―大一〇　田中辰之助　大一一―一二
伊藤敬一　昭三　水谷　清　昭三二―三三

瓜谷良平	昭三二―四三		
鼓　直	昭三四―三五、昭四三―四四、昭四六―五四		
古川武司	昭三五―三九	大原美範	昭三六―四五
橋本定久	昭三八―三九、昭四〇―四一、昭四二―平四		
神吉敬三	昭三九―四三	中曽根悟郎	昭三九―四〇
片岡孝三郎	昭四〇―四一	伊藤武好	昭四一―四二、昭四八―四九
白山孝久	昭四一―四二	辻　羊三	昭四二―四三
高見英一	昭四三―四四、昭五五―五六	加茂雄三	昭四三―四八
寺田和夫	昭四三―四四	橋本一郎	昭四四―五三
伊藤侑徳	昭四五―四六	中川和彦	昭四五―五四
直野　敦	昭四五―五二	増田昭三	昭四六―六三
竹内照高	昭四六―四七	山田睦男	昭四七―五三
佐藤玖美子	昭四九―五一	黒田清彦	昭四九―五四
国本伊代	昭五〇―五八	田中春美	昭五二―五三
岡部広治	昭五二―五五	倍賞和子	昭五三―平八
石井　章	昭五四―五六	**杉山　晃**	昭五四↓
若松　隆	昭五四―五六	後藤政子	昭五五―平一〇
遅野井茂雄	昭五五―五六	秋山紀一	昭五六―五八、平一―二

辻　豊治　昭五六―五七
松本亮三　昭五六―六〇
渡辺節子　昭五六―六〇
濱田滋郎　昭五九―平八
加藤　薫　昭六〇―六二
大高保二郎　昭六二―平一、平二―三、平四―平七、平八―九
中野達司　昭六二―平一
落合一泰　昭六三―平六
佐々木孝　平一―
恒川恵市　平二―六
深沢安博　平三―四
佐藤麻里乃　平四―
大串和雄　平五―六
長岡　顕　平五―九、平一〇―
髙田裕憲　平五―六
小池洋一　平七―八
三角明子　平七―九
江藤一郎　平九―一〇、平一一―

戸門一衛　昭五六―平六
染谷　宏　昭五六―平五
今井圭子　昭五七―五九、昭六二―平七
細野昭雄　昭五九―六二
山村ひろみ　昭六一―六三
福井千春　昭六二―平七
阿部三男　平一―二、平九―
佐藤勘治　平一―三
林みどり　平三―四
長神　悟　平三―七
網野徹哉　平五―七
佐藤邦彦　平五―一〇
長尾史郎　平五―六
狐崎知己　平六―八、平一〇―
八島由香利　平七―八
松下　洋　平七―八
大楠栄三　平九―一〇

栗原尚子　平九－一〇
落合佐枝　平一〇→
愛場百合子　平一一→
芳賀正明　平九→一〇、平一一→
木下　亮　平一〇→一一

――旧制講師および新制非常勤講師（外国人）――

レボリェード、E（個人名不詳）E. Revolledo（スペイン）大三－四
グアスク、アントニオ Antonio Guasch（スペイン）大五－六
カルアーナ・マテオス、マリアーノ Mariano Caruana Mateos（スペイン）昭三二－三九
マタ・トラーニ、ホセ José Mata Trani（スペイン）昭三九－四〇
ミリャン・フエルテス、ホセ・アントニオ José Antonio Millán Fuertes（スペイン）昭四一－四二
ロペス・アルバレス、フリアン Julián López Álvarez（スペイン）昭四五－四九
マロート、テリョ・ヘスス Tello Jesús Maroto（スペイン）昭四九－平二
ロレンソ、ヘスス Jesús Lorenzo（スペイン）平二→
ルイス・ティノーコ、アントニオ Antonio Ruiz Tinoco（スペイン）平一〇→